

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862198

研究課題名(和文)子育て期の親ががんに罹患した際の子どもに対するケアプログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a care program for children of child-rearing mothers suffer from cancer

研究代表者

鬼頭 泰子 (Kitou, Yasuko)

佛教大学・保健医療技術学部・講師

研究者番号：70433232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護師が子育て期のがん患者やその子どもを中心とした家族にどのように関わっているのか、がんに罹患した子育て期の母親が入院している際の子どもへの看護を明らかにした。研究方法として、がん看護に携わる看護師20名に対してインタビュー調査を行った。このデータを質的記述的に分析し、研究成果を学会発表(日本小児保健協会学術集会、European Health Psychology Society)した。最終的な結果は、子育て期にある女性がん患者の子どもとその家族への看護の実態、及び必要とされるケアについての看護師の認識の2論文にまとめ、発表した。

研究成果の概要(英文)：This study revealed nursing for children of child-rearing mothers suffer from cancer. It was investigated about how nurses care for them and their families centered upon their children. The research methods in this study included semi-structured interviews conducted with 20 nurses involved in cancer nursing. At the stage of analyzing this data, we published research results, AT the Annual Meeting of Japanese Society for Child Health, the European Health Psychology Society. Thesis submitted two papers and it was published. "Nursing for children of female patients with cancer in the child-rearing period and their families: a study of approach to children, maternal roles, and mother-child and family relationships" "Nursing for cancer patient families with children: ability of nurses to recognize when care is needed"

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：家族看護 がん看護 子ども 母親

1. 研究開始当初の背景

2002年WHOは緩和ケアを「生命を脅かす疾患に伴う問題に直面する患者と家族に対し、疼痛や身体的、心理社会的、スピリチュアルな問題を早期から正確にアセスメントし解決することにより、苦痛の予防と軽減を図り、生活の質(QOL)を向上させるためのアプローチである。」と定義づけている。悪性新生物(がん)は、どの年齢でも死因の上位を占めており、30代~40代の子育て期の親が罹患することも稀ではない。

親ががんに罹患した子どもたちは精神的衝撃を受ける。親ががんと診断された時の家族看護では、子どもは家族の一員として扱われることが多く、子どもに焦点をあてた支援は、ほとんど注目されてこなかった。一方、養育の大部分を担う親にとっても、「子どものこと」は最も大きな不安要因の1つである。そこで本研究では、親ががんに罹患した子どもを対象に、当該子どもへの看護支援に焦点をあて、病院における看護実態を調査し、看護師に必要なケアを明らかにする。

2. 研究の目的

親のがん治療過程において、「子ども」へ看護師がどのように関わっているか。この中での看護の現状を明らかにし、必要な看護を明確化した上で、看護プログラム(ケアチェック表)を開発し、評価する。

3. 研究の方法

以下(1)~(5)の順に行う。

(1)入院しているがん患者が子育て期である場合、その患者の子どもへどのような関わりをしているか。一般病院勤務の看護師とがん看護専門看護師(各10名)へインタビュー調査を行う。一般病棟ナースと専門ナースの着目点の相違点を明確化し、不足する看護の抽出を行う。

(2)必要な看護の分析、明確化
研究協力者の下、調査データの分析を行い、必要な看護を明確にする。

(3)子育て期にあるがん患者の子どもに対する看護支援プログラム(ケアチェック表)の開発(2)で明確化した看護内容プログラム(ケアチェック表)を開発する。

(4)看護支援プログラム(ケアチェック表)の導入一般病棟(2病院2セクション)で6カ月間チェック表を用いて、看護を行う。介入前に説明を行い、病棟全体でケアチェック表を用いて現状の看護の評価を行う。

(5) (4)看護支援プログラム(ケアチェック表)の導入後の評価

(3)でおこなったものと最終に行ったものチェック表の比較、評価を行う。また実際にケアチェック表を使用した一般病院勤務の

看護師へのインタビュー(10名)を行う。

4. 研究成果

研究方法の(1)~(5)の計画のうち、(1)~(2)までを明らかにした。

本研究では、看護師が子育て期のがん患者やその子どもを中心とした家族にどのように関わっているのか、がんに罹患した子育て期の母親が入院している際の子どもへの看護を明らかにした。

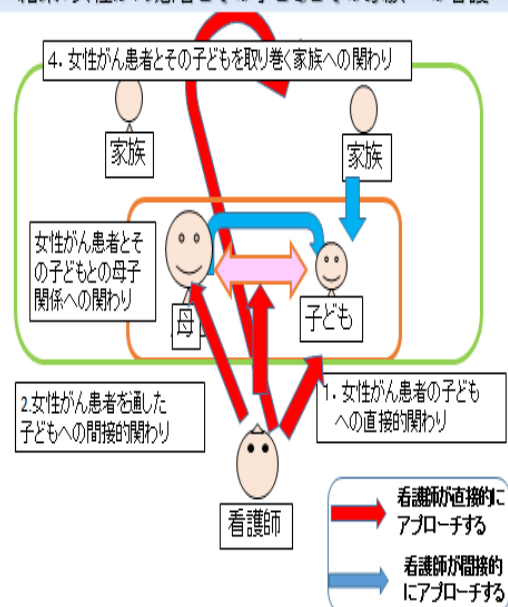
研究方法は、がん看護に関わる看護師20名(一般病院勤務の看護師10名、がん看護専門看護師10名)へ半構成的面接法を実施した。

分析は、質的記述的方法にて子どもに対する関わりに関連する文脈を抜き出し、意味を読み、コード化した。

結果、がんに罹患した母親とその子どもへの看護として、【子どもの生活背景や行動面から子どもの思いを組み取る関わり】、【子どもも母親をサポートする家族の一員として尊重する関わり】、【子どもの年齢・発達や経験に合わせた関わり】、【患者役割と母親役割とのバランスを考えた関わり】、【未来に続く母子関係が病気や治療によって阻まれることが無いような関わり】、【家族が同じ方向に進んでいけるような関わり】、【子どもをサポートしてくれる者への支援】の7カテゴリが抽出された。

この7つのカテゴリを看護師が子どもに関わる上で認識している視点に分けると、子どもへの関わりは直接的な関わりだけではなく、間接的な関わり、母子関係への関わり、子どもを中心とした家族への関わり等の4つの側面から子どもの看護に繋げて行っていることが明らかになった。

結果: 女性がん患者とその子どもとその家族への看護



論文中に4側面からの具体的な看護実践データを示したことから、実際に関わる方法や不足する看護支援について、多面的な側面から看護実践に取り入れていけるものと考えられる。

次に、がん患者の子どもへの看護を行う看護師の認識を明らかにした。

調査方法は、子育て期にあるがん患者の子どもへの看護についての経験を持つ看護師4名(一般病棟看護師2名、がん看護専門看護師2名)を対象に、実際のケアの経緯やケアの根拠、考えや思いについて質的記述的方法にて分析した。分析は、女性のがん患者の子どもへの実際のケアとケアに至るまでの考えを文脈ごと抜き出し、「ケアの経緯や根拠の看護の認識」と「これまでの実際のケア」の視点から解釈しカテゴライズした。

この中で明らかになったことは、患者や家族のライフステージを見通した関わり病院外での子どもと他者の関係性をイメージした関わり 子どもからの視点を持った関わり 専門看護師としての高い役割意識と内省を生かした関わりであった。

がん患者の家族の一員である子どもへの関わりとして、急性期、慢性期、ターミナル期と治療期のある期間で区切った関わりではなく、母親ががんと告知されたその時から様々な進行状況を想定した、見通しのある関わりをいかに持ち、 のように看護者としての高い専門性を生かした看護実践に生かせるかが必要であることが示唆された。

さらに、 のようにがん患者とその家族に関わる上で、患者やその家族が持つ視点や様々な役割にまで、看護師が広い視点を持つことが重要であることが明らかになった。

今後の課題として、現在がん治療は外来でも行われるため、対象看護師を外来看護師等に拡大し、調査を行う必要がある。また、幼児期、学童期、思春期等子どもの発達段階に合わせた看護師の関わりについても明確にしていく必要がある。

分析によって明らかになった課題点と今回の研究で明らかになった内容を活用しながら、今後看護師の認識の向上と具体的な看護実践を行っていきけるような教育プログラムを検討していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

鬼頭泰子, 田淵紀子, 藤田景子, 奥村真美, 中野育子: 子育て期にある女性がん患者の子どもとその 家族への看護の実態 - 子ども, 母親, 家族へのそれぞれのアプローチからの検討 - 金沢大学つるま保健学会誌, 査読有, Vol. 40 (2), 11-21, 2016.

Yasuko Kitou, Noriko Tabuchi, Keiko Fujita, Masami Okumura: Nursing for cancer patient families with children: ability of nurses to recognize when care is needed Journal of the Tsuruma Health Science Society Kanazawa University, With peer review, Vol. 40 (2), 67-75, 2016.

〔学会発表〕(計2件)

Kitou Yasuko, Ryo Takahashi, Masami Okumura, Noriko Tabuchi, Keiko Shimada, Ikuko Nakano: Japanese nurse awareness in relation to the children of female cancer patients, 28th Conference of the European Health Psychology Society, 2014.8.29, Innsbruck, (Austria)

鬼頭泰子, 高橋亮, 奥村真美, 田淵紀子: 子育て期の母親ががん治療を受ける場合の子どもへのケア~一般病棟看護師のケア現状~, 第61回日本小児保健協会学術集会, 2014.6.21, (国内: “福島グリーンパレス(福島県・福島市)”)

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鬼頭 泰子 (KITOU, yasuko)
佛教大学 保健医療技術学部 看護学科・講師
研究者番号: 70433232

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし

(4)研究協力者

・田淵紀子 (Noriko Tabuchi)
金沢大学 医薬保健研究域保健学系
看護科学領域・教授

・奥村真美 (Masami Okumura)